

はじめに

学校や家庭、そして地域社会の中で、子どもは指導的立場にある教師や大人とのかかわりだけでなく、子ども同士のかかわり合いをも通して、様々なことを学習し、自己形成していきます。しかも、その子ども同士のかかわり合いは子どもの成長とともに、その重みを増していきます。

ところが、核家族化や少子化、都市化、過疎化などがかなり進行している今日では、家庭や地域における子ども同士のかかわり合いが希薄になってきており、そのため、いきおい、学校における子ども同士のかかわり合いが大きな役割を担うようになってきています。

昨今、子どもの学力低下が問題視され、学校においても少人数学習や補充的な学習、習熟度別学習など様々な取り組みがなされていますが、そこで問題にされている学力は、評価の容易な「習得された知識や技能」という狭義の学力を指していることが多いようです。しかし、子どもにとって「生きる力」としてより重要なものは、判断力、表現力、批判的な思考力、討論する力などでしょう。このような力は、個人指導や、ややもすれば一方的になりがちな教師とのかかわりよりも、むしろ、子ども同士の活発なかかわり合いの中で養成されます。そして、そのような子ども同士のかかわり合いを通して、学力だけでなく、協調性や思いやる心なども育まれ、豊かな人間性が涵養されていきます。

本校はこのような子ども同士のかかわり合いを重視して、「創発のある学び舎」という研究主題で教育実践研究を行ってきました。今年度の研究はその過去3年間の研究成果と、その成果からさらに浮き彫りになった課題をふまえ、「学びを深めようとする思い」を育むことに焦点を当てて行った最終研究です。

ここで創発というのは、複雑系科学における定義に準じ、「予測や意図を超えた構造変化や創造が誘発される」という意味に用いています。子どもは学級集団の中で、それぞれ異なった個性や価値観を持ちながらも、互いに助け合い、協力し合い、時には競合しながら、またある時は、共感したり批判したりしながら、様々な活動をしています。その様な子ども同士のかかわり合いによって、その学級集団に予測や意図を超えた構造変化や創造が誘発されると考えています。そしてそのフィードバックとして、今度は学級集団が個々の子どもに影響を及ぼします。このようにして、子どもと学級集団とが相互に影響し合うなかで、子どもは広義の学力を身につけ、豊かな人間性を醸成していきます。本研究では、子ども同士のかかわり合いをさらに拡張して、子どもが「ひと・もの・こと」に積極的にかかわり合うという学校教育の場を思い描き、それを「創発のある学び舎」と称してきました。

教師はそのような子どものかかわり合いがうまく機能するように見取りながら、「創発の学び」へと導きますが、究極のねらいは、個々の子どもがその学びを深めようとする思いを自発するようになり、さらに、その思いが学級全体に気風となって定着することです。そのために本研究では、個々の子どもと学級集団の間に正のフィードバックを繰り返しつつ、「学びを深めようとする思い」を育むサイクルモデルを想定しています。

本研究紀要は、そのような「創発の学びを深めようとする思い」に視点を置いた実践研究の報告書です。高覧いただき、忌憚のないご意見とご指導を賜れば幸いです。

平成17年11月10日

金沢大学教育学部附属小学校

校長 畠中 洋志